

SPEED'98改訂後の新たな対応方針に記載する項目に関する方針(案)

はじめに

SPEED'98 について、見直しの経緯を述べる。

内分泌攪乱化学物質問題に関するこれまでの取組

1．取組の状況

SPEED'98 に基づくこれまでの取組について、その概要と主な成果、残された課題、新たに提起された課題等を整理する。

- (1) 環境中の化学物質濃度や野生生物の状況
- (2) 生態系への影響をみるための試験
- (3) ヒトへの影響をみるための試験
- (4) 国際的な協力

2．これまでの試験結果の評価と影響に関する報告例及び評価

- (1) これまでの試験結果の評価
- (2) 影響に関する報告例及び評価

課題と今後の方向性

1．基本的な考え方

様々な情報を踏まえ SPEED'98 以降の「内分泌攪乱作用」の定義をあらためて確認する。その上で、今後取り組むべき課題、対応すべき課題の対象とすべき範囲を概観する。

2．今後の方向性

(1) 基盤的研究の推進

内分泌系への作用発現経路を解明するために、分子レベルの研究や動物モデルを用いた研究仮説の立証などによって、作用メカニズム研究や基礎的な生物学的知見の充実を図るための研究を推進する。

(2) 環境中での検出状況の把握、野生生物等の観察

- ・化学物質環境に係る実態調査等の継続的な実施結果を踏まえ、さらに環境中の実態把握を容易にするための分析手法の開発を行う。
- ・環境及び野生生物等を長期的継続的に観察する等により、我が国における生態系の異変・変化を捉えて、内分泌攪乱作用の観点から更に調査すべき情報を収集できる体制の整備を図る。

(3) 曝露の測定

- ・ 影響評価を行うための基礎データを得るとともに、リスク評価に資する曝露の測定を実施する。
- ・ 対象物質の中には天然由来の物質等も入れておく必要があるため、手法の開発が必要である。
- ・ 一方、曝露の偏りについても考慮できるよう方法論の検討が必要。

(4) 影響評価のための技術開発の推進

- ・ ヒト健康と生態系への影響を推察するため内分泌攪乱作用に関する影響評価手法の開発と評価を進める。(フロー図)
- ・ その際、環境中の濃度を視野においた曝露濃度での評価手法として開発を進める。
- ・ 生殖系のみでなく甲状腺その他の内分泌系を対象として捉える。
- ・ 一方、天然由来の物質の作用との比較も目指す。
- ・ ヒトへの影響の観点では疫学的手法の確立を進める必要がある。

(5) リスク評価

上記(1) ~ (4) を踏まえて、リスク評価を推進する。

(6) リスク管理

当面のリスク管理はリスクコミュニケーションに基づく自主的取組が中心となるものと考えられる。

(7) リスクコミュニケーションの推進

- ・ SPEED'98 に欠けていたリスクコミュニケーションを重視し、内分泌攪乱作用問題に関するリスクコミュニケーションのあり方、課題を整理する。
- ・ さらに、内分泌攪乱作用についての正確な理解が深まるようリスクコミュニケーションを推進することにより、リスク管理にも資する。
- ・ その際、産官学による情報交換、役割分担のもとでのリスクコミュニケーションの推進、予防的取組方法による対応の可能性、を検討する。

(8) 取組に当たって配慮すべき事項

- ・ 研究結果の解析手法
 - ・ 国際的連携による情報と研究成果の共有化
 - ・ 国内関係省庁や関係機関との連携と分担
- などに言及する。

(付属資料)

- ・ 世界の取組の動向
- ・ 化学物質検討フロー図
- ・ 本文書を作成するにあたって参考とした文献
- ・ 内分泌攪乱化学物質問題検討会委員名簿
- ・ 環境ホルモン戦略計画SPEED'98改訂ワーキンググループ委員名簿
- ・ 同文献評価作業グループ検討会委員名簿

全化学物質

・国際機関や国内外の公的機関が公表した報告書等において内分泌系への影響、内分泌系を介した影響または生態影響等が懸念された物質
 ・化審法・PRTR法・環境中や食品中濃度に関する各種規制・基準などに記載された物質 等

検討を考慮する物質(作業物質)

[天然及び合成ホルモンを含む]

国内で未検出で使用実態が認められなかった物質群及び信頼性が認められた影響有りとする情報が得られなかった物質群

現時点では、明らかな内分泌攪乱作用が認められなかった物質または現時点では、曝露の可能性が低く、現実的なリスクが認められなかった物質

・信頼性が認められた新たな知見により再検討

[検討物質の選抜]

・使用実態が認められなかった物質

国内の既存の検出情報の有無

国内で未検出の物質

国内で未測定 of 物質

測定の実施による新たな検出の有無

未検出の物質

国内の使用実態の有無

使用実態が認められた物質

検出された物質

国内で検出された物質

影響有りとする情報の信頼性の確認

信頼性が認められた影響有りとする情報が得られなかった物質

信頼性が認められた影響有りとする情報が得られた物質

検討物質

総合的な判断で現時点では明確な内分泌攪乱作用が認められなかった物質

検討(試験等の実施)
 [国際的な知見の共有や国内での他制度による検討の結果]

総合的な判断で内分泌攪乱作用が認められた物質

既存の有害性等の知見と比較して、より高い濃度(用量)においてのみ内分泌攪乱作用が認められた物質または曝露の可能性が想定される濃度(用量)と作用の認められた濃度(用量)との乖離が比較的大きい物質

作用の認められた濃度(用量)と既存の有害性に関する知見等との比較

既存の有害性等の知見と比較して、より低い濃度(用量)においてヒト以外の生物種に対して内分泌攪乱作用が認められた物質または曝露の可能性が想定される濃度(用量)と作用の認められた濃度(用量)との乖離が比較的小さい物質

既存の有害性等の知見と比較して、より低い用量においてヒトに対して内分泌攪乱作用が認められた物質または曝露の可能性が想定される用量と作用の認められた用量との乖離が比較的小さい物質

ヒト以外の生物種においてのみ内分泌攪乱作用が推察された物質

ヒトにおいて内分泌攪乱作用が推察された物質

注: 検討物質の選抜に当たっては、例えば、以下の内容を検討する
 ・曝露の可能性の確認(例えば、環境中・生体中・食品中等での検出の有無、国内での生産・使用の有無、生産・使用量の考慮、分解性・蓄積性の考慮など)
 ・影響有りとする情報の確認(例えば、知見の信頼性評価など)

注: 影響有りとする情報とは、
 ・生殖器、甲状腺、下垂体等の内分泌系への影響
 ・内分泌系を介した免疫系や神経系への影響
 ・生態影響等の影響が認められたとする情報を示す

化学物質検討フロー図(案)